

日南市教育研究所

研究主題と副題	．．．．． 3 - 4 - 1
主題設定の理由	
研究目標	．．．．． 3 - 4 - 2
研究仮説	
研究組織	
目指す児童生徒像	
研究構想	．．．．． 3 - 4 - 3
研究内容	．．．．． 3 - 4 - 4
1 本研究が目指すこと	
（１）「産学官連携」とは	
（２）４つの学ぶ力とキャリア教育で育む基礎的・汎用的能力との関連	
（３）研究内容の発信	
2 授業実践班の研究内容	
（１）体験型アクティビティの考え方	
（２）体験型アクティビティの授業実践	．．．．． 3 - 4 - 5
ア 授業の内容	．．．．． 3 - 4 - 6
イ 考察	
（３）体験型アクティビティの原理・機能を活かした授業実践	
ア 授業実践に当たっての考え方	
イ 授業の内容	
ウ 考察	
3 地域連携班の研究内容	．．．．． 3 - 4 - 7
（１）地域連携班が目指すこと	
（２）グッジョブフェスタ in にちなん	．．．．． 3 - 4 - 8
ア 産学官の連携	
イ 活動の実際	
（ア）事前授業	
（イ）活動の実際	．．．．． 3 - 4 - 9
（ウ）事後授業	
ウ 児童生徒の変容	
（ア）検証授業から	
（イ）児童生徒の感想	
成果と課題	．．．．． 3 - 4 - 10
1 成果	
2 課題	
引用・参考文献	
研究同人	

研究主題と副題

将来に夢をもち、新時代を生き抜く「4つの学ぶ力」を身に付けた日南っ子の育成
～産学官連携によるキャリア教育の推進を通して～

主題設定の理由

社会の動向から

今日、産業界・経済界の構造的変化、雇用形態の多様化・流動化を背景として、就職・進学を問わず児童生徒の進路を取り巻く環境は大きく変化している。さらに児童生徒の勤労観・職業観の希薄化や社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質を培う上での課題、資質・能力の発達の遅れをめぐる課題、社会問題となっている若者の早期離職率、フリーターやニートの割合の増加等は、近年憂慮すべき問題である。

このような状況を解決していくためには児童生徒一人一人が「生きる力」を身に付け、適切な勤労・職業についての価値観を自ら形成・確立し、将来直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応する力を高めることが重要であり、これまで以上にキャリア教育を推進することが望まれている。

本県においては、第二次宮崎県教育振興基本計画（平成23年6月）を策定し、その中でもキャリア教育の推進を重点施策と位置付けている。また日南市重点戦略プラン「創客創人」（平成27年）のビジョン4「次世代育成戦略」では重点施策として「4つの学ぶ力を身に付ける日南教育の推進」「郷土に愛着と誇りをもつ児童生徒の育成」「児童生徒が自分らしい生き方を選択するためのキャリア教育の充実」を掲げている。

昨年度までの研究から

日南市は、「新時代を生き抜く『4つの学ぶ力』を育てる日南教育」をスローガンとして、「他者から学ぶ力」「自ら学ぶ力」「自然から学ぶ力」「社会から学ぶ力」を身に付け、豊かな心と確かな学力を身に付けた児童生徒の育成に取り組んでいる。その具現化のための方策として、一貫性・連続性のある教育システムを構築し、9年間を見通した指導を進めている。

昨年度、本研究所では、キャリア教育を推進するために、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）に着目し、大学などの専門教育機関、地域の企業や事業所、学校、行政による産学官連携を核に共同研究を進め、広い視野で多面的に実践を行った。授業実践班においては宮崎大学が研究・開発した「体験型アクティビティ」を授業に取り入れ、4つの学ぶ力の育成につなげた。地域連携班においては、地域の企業等と連携した取組「グッジョブフェスタ in にちなん」で小学生に職業体験や職業講話を行った。また中学生を対象とした職業講話、さらには宮崎大学訪問研修を行い、勤労観・職業観の育成につなげることができた。

本年度の研究を進めるに当たって

そこで本年度も更なる成果を求めて、引き続き研究主題を「将来に夢をもち、新時代を生き抜く『4つの学ぶ力』を身に付けた日南っ子の育成」、副題を「産学官連携によるキャリア教育の推進を通して」と設定した。「4つの学ぶ力」とキャリア教育で身に付ける力である基礎的・汎用的能力を身に付けるために効果的な活動である体験型アクティビティの実践の充実を図っていくこととした。さらに地域の人材や企業との連携を図り、授業で学んだことを活用しながら学びを深化させる仕組みを構築することで「産」との連携を図っていくことにもした。

本研究において、児童生徒は「4つの学ぶ力」を身に付け、自分なりの勤労観・職業観をもち、研究主題の達成に迫っていくことができると考え、主題を設定した。

研究目標

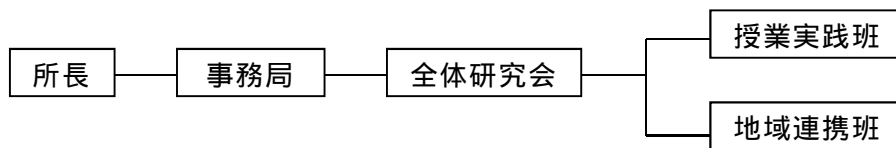
体験型アクティビティの理論を構築し、授業実践をしたり、地域の人材や企業等との連携を強化したりするなどの産学官連携によるキャリア教育を充実することで、新時代を生き抜くために必要な「4つの学ぶ力」を身に付けさせるための指導と産学官の連携の在り方を究明する。

研究仮説

産学官連携による体験型アクティビティの実践を通して、その活動の在り方や児童生徒の変容、評価の在り方を検証していけば、児童生徒は新時代を生き抜くために必要な「4つの学ぶ力」を身に付けることができるであろう。

産学官連携における地域の人材や企業等と連携し、働くことに関する多様な価値観を学ばせたり、実際に仕事を体験させたりする取組を充実させれば、児童生徒は新時代を生き抜くために必要な「4つの学ぶ力」を身に付けることができるであろう。

研究組織



目指す児童生徒像

目指す児童生徒像を設定し、以下のようにとらえた。

将来に夢をもち、新時代を生き抜く「4つの学ぶ力」を身に付けた日南っ子

適切な勤労観・職業観をそなえ、学ぶ意欲・働く意欲にあふれる子

基礎的・汎用的能力を身に付けた子

身に付けた「4つの学ぶ力」を総合的に活かすことができる子

ふるさとを誇りに思い、ふるさとについて考えを深めることができる子

「将来に夢をもち」とは

- ・・・将来に夢をもち、生涯にわたって学ぶ・働く意欲をもち続けることができる。

「新時代を生き抜く」とは

- ・・・変化の激しい時代でも、課題を明らかにして周りの人と協力しながら課題を解決することができる。

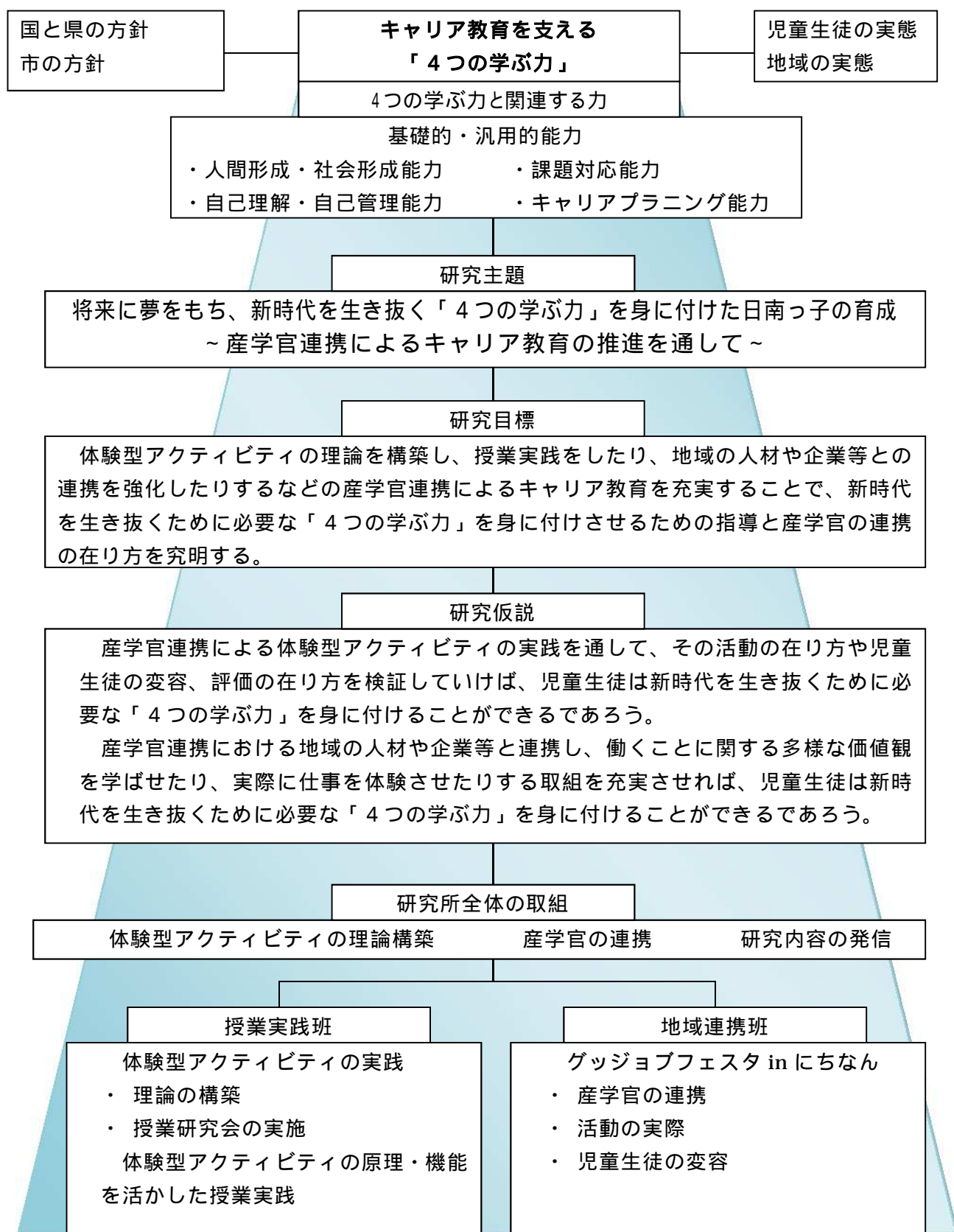
「『4つの学ぶ力』をもつ」とは

- ・・・日南市の学校等で学んだことを生涯にわたって活用できる。

「自立した日南っ子」とは

- ・・・自分で将来生計を立てることができるとともに、ふるさとの将来について考えることができる。

研究構想



研究内容

1 本研究が目指すこと

(1) 「産学官連携」とは

本研究所は「産学官」が連携をとりながら研究を推進していくことで主題に迫る。

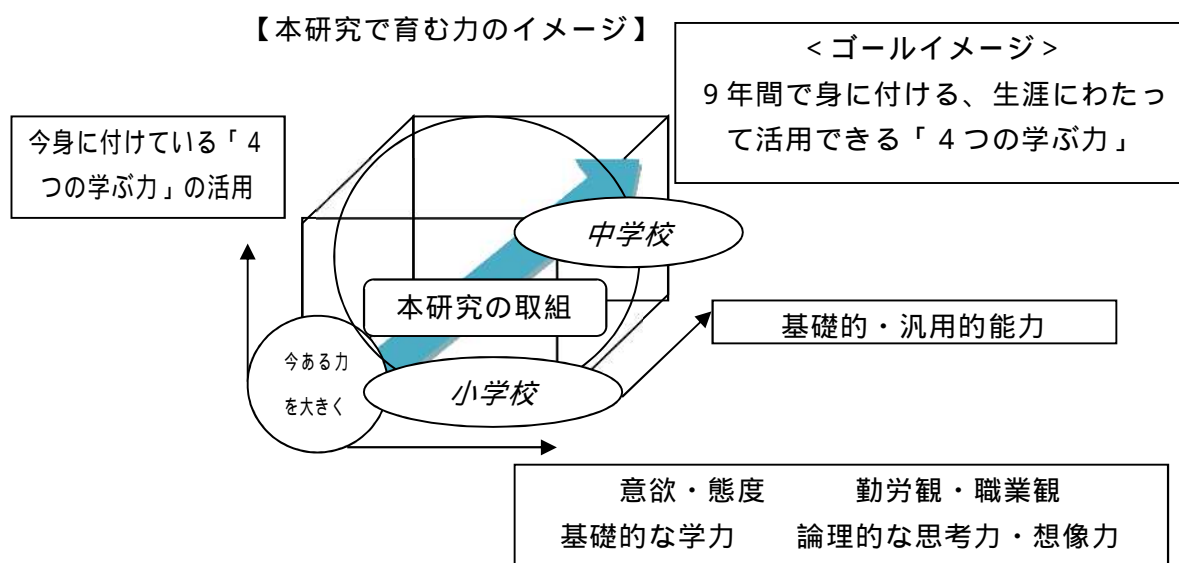
「産」・・・日南市地元企業や地域団体、地域の方々

「学」・・・日南市内小・中学校、宮崎大学

「官」・・・日南市、日南市教育委員会

(2) 4つの学ぶ力とキャリア教育で育む基礎的・汎用的能力との関連

本研究での実践は、日南市が掲げる「4つの学ぶ力」を高めるとともに、基礎的・汎用的能力などキャリア教育で育成する力を同時に高めていく。



(3) 研究内容の発信

日南市教育研究所では、今年度研究している内容を、日南市内の小・中学校の教職員に知ってもらうことを目的に、「日南市教育研究所便り」を定期的に発行した。

以下、その内容である。

発行回数	時期	主な内容
第1号	9月	・ 研究員の紹介及び主な研究内容
第2号	10月	・ 授業実践班の取組、体験型アクティビティの説明 ・ 日南市教育研究所の様子（各班の活動の様子）
第3号	11月	・ 地域連携班の取組の説明 ・ 「グッジョブフェスタ in にちなん」の紹介
第4号	12月	・ 地域連携班の取組の紹介
第5号	2月	・ 研究の成果と課題

2 授業実践班の研究内容

(1) 体験型アクティビティの考え方

体験型アクティビティとは、宮崎大学で開発した、1、2単位時間で行うことができる活動である。これまで「エッグシェルター」「積み木タワー」などの授業を行ってきた。

体験型アクティビティに取り組む目的

- ・ 本研究で高めたい力（4つの学ぶ力や基礎的・汎用的能力、学ぶ意欲）の定着と向上。
- ・ 体験型アクティビティの原理・機能（思考や授業の構成）を活かした授業展開による授業改善。

体験型アクティビティから以下のことが期待できる。

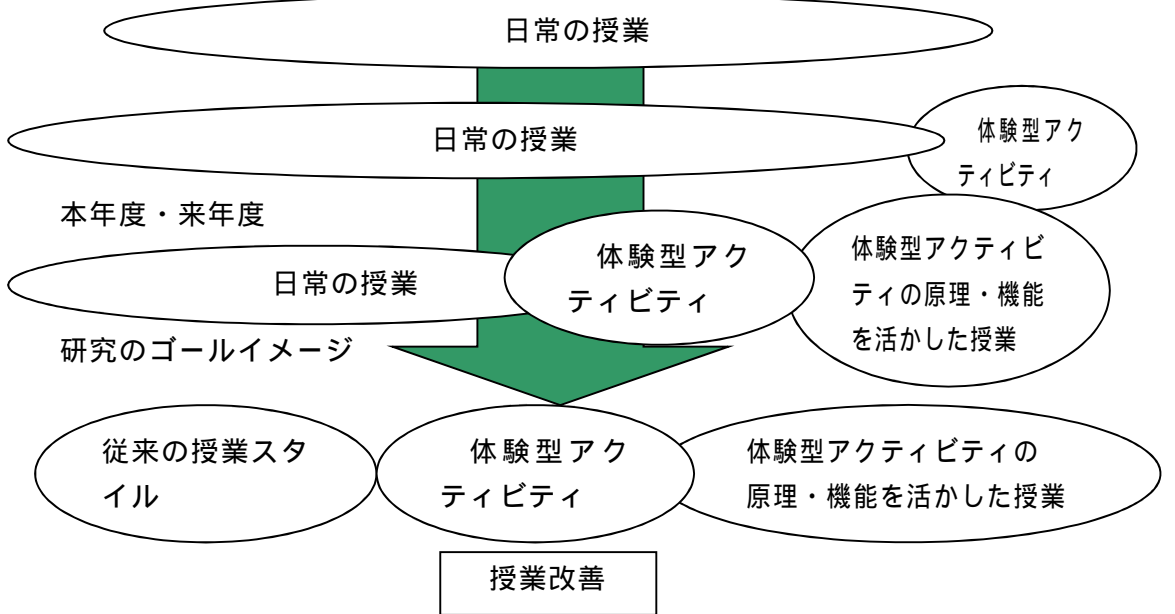
高まる力	授業について	学級経営について
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「自ら学ぶ力」「他者から学ぶ力」を中心に、自分が身に付けている「<u>4つの学ぶ力</u>」を総合的に活用しながら<u>取り組める内容</u>である。さらにこの活動によって<u>4つの学ぶ力を伸ばすことができる</u>。 ・ 「<u>基礎的・汎用的能力</u>」や「<u>学ぶ意欲</u>」を高めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>原理・機能を応用すると、普段の授業の改善につなげることができる</u>。 ・ 体験型アクティビティで獲得した技能を教科や日常生活に広げることができる。 ・ 教師の変容（課題設定力、発問を考える、ほめ言葉が増える、児童生徒の変容をとらえる力が増す等）が期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒の全員参加を促すことができる。 ・ 児童生徒同士の間関係の向上が図られ、学級経営に役立てることができる。 ・ 脳がアクティブ（能動的）になり、より活発な思考を促すことができる。 ・ 児童生徒同士の関係性とその変容を見ることができる。



< 授業改善のイメージ >

- ・ 体験型アクティビティで獲得した技能（協力する等）を他教科や日常生活で活用する。
- ・ 体験型アクティビティの授業構成などを日々の授業に活かす。

これまで



(2) 体験型アクティビティの授業実践

第1回日南市教育研究所授業研究会を平成28年9月9日（金）に日南市立吾田東小学校にて行った。授業研究会を開くことで、研究所の取組や体験型アクティビティを市内の教職員に周知したいと考えた。

ア 授業の内容

「積み木タワー」という体験型アクティビティを行った。「積み木タワー」とは、グループで協力しながら制限時間内にできるだけ高く積み木を積み上げる活動である。授業を以下のように構成した。

段 階	活 動 内 容
学習の約束 チャレンジ 1 回目	・ 本時の活動の概要を説明する。 ・ 「協力して取り組む」ことを確認する。 ・ チャレンジ 1 回目を行う。
思考と議論 試行錯誤	・ グループでの話し合いをする。個人 グループ ・ 話し合ったことを基に試行錯誤する。
仮説の設定 チャレンジ 2 回目 チャレンジ 3 回目	・ グループごとに作戦を決定する。 ・ チャレンジ 2 回目を行い、1 回目と比較する。 ・ チャレンジ 3 回目を行う。
評 価	・ ワークシートを基に振り返りを行う。

イ 考察

学級の 93% の児童が『本時学習が楽しかった』とワークシートにて回答した。児童は意欲的に学習に取り組むことができていた。しかし「協力する」というねらいを教師と児童がきちんと認識して活動を行わないとただ「楽しかった」だけで終わってしまう。それでは体験型アクティビティのねらいはもちろん、4 つの学ぶ力も育成することができない。



【積み木タワーの様子】

< 体験型アクティビティを行う際に気を付けること >

授業のねらい（本学習で身に付けさせたい力）を明確にすること。

「振り返り」の段階でねらいに対する評価を教師と児童生徒が行うこと。

本学習で身に付けた力を他教科や日常生活で活用できるように継続して指導を行うこと。

以上のことが明らかになった。

（3）体験型アクティビティの原理・機能を活かした授業実践

平成 28 年 1 2 月 2 日（金）に吾田中学校において第 2 回日南市教育研究所授業研究会を行った。体験型アクティビティの原理を活かした教科指導を行うことで、授業改善の視点を日南市内の小・中学校に広げようと考えた。

ア 授業実践に当たっての考え方

（ア）体験型アクティビティの原理を活かす授業とは

「問題が起きたときに、どう解決するか」という「問題解決的な思考」だけでなく、「問題はどこにあるのか」を考える、『問題提起的な思考』をもたせた授業を展開する。

『問題提起的な思考』を高めることが、今の社会で求められている、新しい発想で商品やサービスを開発する『革新的な力（イノベーションする力）』を高めることにつながる。

『問題提起的な思考』に焦点を当てた活動を展開するが、問題提起するだけ

では、数学の授業における本時の目標を達成することは難しいため、授業においては「問題解決」も求められる。

授業の展開を、体験型アクティビティの流れに沿って、課題の認識 試行錯誤 思考と議論による『問題提起』 仮説の設定 検証 協議 問題解決という流れで行う。

(イ) 体験型アクティビティの機能を活かす授業とは

体験型アクティビティで獲得した、話し合いの仕方や他者との協力の仕方など、コミュニケーションスキル等を活かして、試行錯誤の場面や検証、協議の場面での活発な意見交換や思考の深化・練り合いができることをねらう。

イ 授業の内容

単元名：図形の調べ方（中学2年生）

本時の目標

- ・ 2つの三角形がどんな場合に合同になるかを考え、その結果を自分なりにまとめようとするができる。
- ・ 三角形の合同条件を導くことができる。

授業の実際

例示した三角形と合同な三角形の描き方を生徒自身の自由な考えで「試行錯誤」させ、活動を通して、生徒の中から『合同な図形を描くためには、何か決まりがあるのでは』というような問題提起とその問題に対する「仮説」を立てさせる。そして「検証」する段階で、仮説に基づいて合同な三角形を実際に描かせることで、3つの三角形の合同条件を導き、「問題解決」を図る活動である。

ウ 考察

数学の授業においても、授業展開を工夫することによって、アクティビティの原理を活かした授業を行うことが可能であった。

活動の中で、特に『試行錯誤』、『問題提起』、『仮説の設定』の時間の確保を十分に行うことが必要となる。

生徒自らが、問いや疑問をもったり、解決のための仮説を設定したりするためには、教師の発言の仕方や題材・教材の提示の仕方に工夫が必要である。

3 地域連携班の研究内容

(1) 地域連携班が目指すこと

本研究班は、産学官で連携し、児童生徒が仕事を体験したり、社会人から生き方を学んだりすることで広い視野に立って社会を見る力、社会参画する力を育て、4つの学び力を身に付けることを目指している。

これまで、勤労観・職業観の育成をねらいとして、小学校・中学校・高等学校で職場見学、職場体験、インターンシップなどの体験学習が実践されている。しかし、ここで懸念されることは、体験活動を実施することが前提となり、その目的やねらい、有効な活動の在り方が十分に検討されないまま実践されてしまうことである。そこで、高等学校のインターンシップに接続できるようにするために、児童生徒の発達段階を考慮し、体験学習内容を以下のように系統的に整理した。

児童生徒の発達段階を踏まえた活動のねらい及び内容を設定する。

「事前」「事中」「事後」の各段階における指導の在り方を明確にする。

体験学習の教育的効果をより高めるためには、事前・事後の指導が重要になってく

る。そこで「事前」「事中」「事後」それぞれの段階における指導の在り方を次のようにまとめた。

	指導の視点	具体的な指導内容	配慮事項
事前	目的の意識化 「何を学ぶか」	目的設定 ルールやマナー 安全の指導 企業との事前交渉	興味・関心以上に「何を学びたいか」に重点を置いて考えさせる。 児童生徒自身に考えさせる。 発達段階に応じ、教師と児童生徒の役割を明確にする。
事中	目的の具体化 「試す」 「調べる」	職場見学 職場見学 インターンシップ	働く人の表情や動きなどに着目させて考えさせる。 「働くこと」について、体験を通して考えさせる。 職業の「特性」や仕事を「労働」と「ビジネス」の2つの側面から考えさせる。
事後	活動の内面化 「変容」	意識変容の認識 活動整理 知識と意識の共有化	体験を通して、職業や自分自身に対する意識がどう変容したか考えさせる。(内面化) 分かったことや気付いたこと、感じたことなどをまとめさせる。 分かったことにとどまらず、個々の変容を紹介させる。

これらの学びを日々の学校生活に活かし、将来にわたって生きる力を高めるために、市内小・中学校では、小学校高学年で職場見学、中学校2年または3年で職場体験学習が行われている。しかし、市内中学校1年は地域を知るための教育活動はあるが、社会から生き方を学ぶ機会は少ない。そこで、本年度は小学校5、6年と中学校1年を対象に「グッジョブフェスタinにちなん」を開催することにした。また、職場体験学習は、担当者の負担が重く、行事に追われる中で実施すると単なる体験活動に終わることがある。職場体験学習をその後の生き方や社会参画につなげるために日南市全体で取り組むための手立てを講じた。現在、職場体験学習については、産学官連携を始めたばかりなので、「グッジョブフェスタinにちなん」について詳細を以下で述べる。

(2) グッジョブフェスタ in にちなん

ア 産学官の連携

日南市教育委員会、日南商工会議所青年部、宮崎労働局ハローワーク、日南市教育研究所で「グッジョブフェスタ in にちなん実行委員会」を組織し、地域で子どもを育てるための検討を行った。

どの事業所においても働く喜びや苦勞、生き方について話をしてもらうために実行委員会が全事業所に対して30分単位を一区切りとする話し方マニュアルを作成し、児童生徒に対して容易に説明できるように工夫した。また、体験後は、児童生徒から質問等を出させて、互いの考えをシェアできるようにした。さらに、現在の仕事の内容や喜び、苦勞に加え、今後の学校生活で身に付けておかないといけないこと(例：大きな声で挨拶すること、責任をもって係活動することなど)を話してもらうことにした。

イ 活動の実際

(ア) 事前授業

体験の目的を明確にすることと、事前、事後での参加者の意識の変容を自覚させることを目標に事前授業を行った。その手立てとしてイメージマップを活用し、働くという言葉をもとに連想する言葉をその周りに書かせた。

(イ) 活動の実際

児童生徒は、事前授業において体験のねらいを明確にした後、一人4事業所で体験学習を行った。体験学習では、まず初めに 仕事の楽しさ 仕事の厳しさや困難

なこと 大人になるまでに身に付けてほしいことを事業所の方に約5分間話してもらい、児童生徒は、思ったことや考えたこと等をワークシートにまとめた。各事業所とも、昨年の反省等を踏まえ、児童生徒の興味や関心を高める教材や教具を準備していた。その後の生徒の感想から体験が充実していたことがよく分かった。児童生徒が体験する4つの事業所の決定については、希望する職種に将来就かない可能性があることを踏まえ、希望の事業所を2カ所、それ以外の事業所を2カ所設定した。これは、児童生徒に「体験を通して働く意義や学校で学ぶことの大切さを考えさせること」をねらいとしたからである。



【職業体験の様子】

(ウ) 事後授業

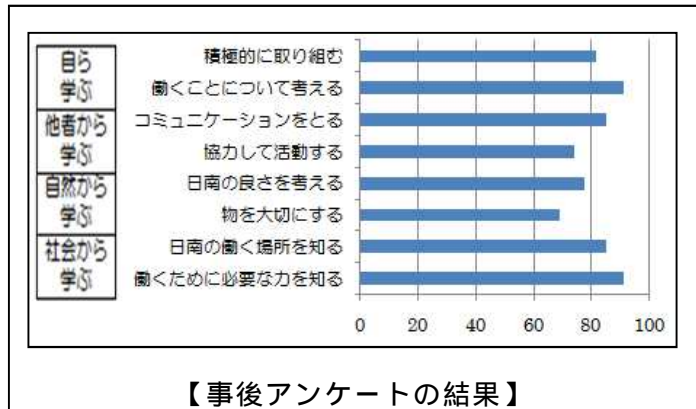
体験後の事後指導では、事前授業で記入したイメージマップを活用し、新たに加わった言葉を赤字で追加記入させた。視覚化することで自分の意識の変容に気付かせ、他者や社会から学ぶことの大切さを認識させることができた。

その後、平成28年11月24日(木)日南市立油津小学校にて事後授業を行った。学校では「グッジョブフェスタ in にちなん」で学んだことと自分の学校、生活とを結びつけ実践化していくこと、グッジョブフェスタに参加した児童の経験を参加していない児童のキャリア発達にも役立てることをねらいとした。児童は、事業所の方に聞いた「働くために必要な力」が普段の学校や家庭での生活と強く繋がっていることを考えることができた。

ウ 児童生徒の変容

(ア) 検証授業から

グッジョブフェスタ終了後、生徒にアンケートを実施したところ、4つの学ぶ力すべてにおいて「学ぶことができた」と回答した児童生徒が過半数を超えた。特に、「働くことについて考える」や「働くために必要な力を知る」ことができ



【事後アンケートの結果】

たと答えた児童生徒は9割を超え、勤労観・職業観の育成を図ることができた。また、体験前の働くことに対するイメージマップでは、「お金を稼ぐ」「きつい」「疲れる」等の意見が多かったが、体験後は、「笑顔」「あいさつ」「時間を守る」「コミュニケーション」「感謝」等、日常生活とのつながりを意識した意見が多く見られ、自己と他者、社会とのつながりを意識させたキャリア教育が実践できたことが分かった。

(イ) 児童生徒の感想

参加者の約98%の児童生徒が「楽しかった」と回答し、そのうち約83%が「とても楽しかった」と答えた。また、「次回も参加したいか」の問いに対し、全員が「参加したい」と答え、そのうち約73%が「ぜひ参加したい」と回答した。生涯にわたって学ぶ意欲が高まると同時に、「自ら学ぶ力」「他者から学ぶ力」「社会から学ぶ力」の向上につながった。

成果と課題

1 成果

体験型アクティビティの研究・開発に取り組む中で、児童生徒が身に付けた技能を他の学習に活かす姿が見られるようになった。

体験型アクティビティの実践を通して、体験型アクティビティを行う際に気を付けることを明らかにすることができた。また児童生徒が意欲的に学習に取り組んだり、授業の約束事を基にして評価を行ったりする必要があることが明らかになった。

昨年度から取り組んでいる産学官の連携により小学校の職場見学や中学校の職場体験学習、高等学校のインターンシップへの「つながり」を意識したキャリア教育を実践することができた。その中で、ふるさとのよさに気付き、積極的に課題を解決しようとする力の育成を図ることができた。

地域の教育イベントと学校の授業に「つながり」をもたせることで、他者に対して謙虚な姿勢で接し、学校生活を自ら振り返り、行動に活かそうとする力の育成を図ることができた。

2 課題

体験型アクティビティの系統性を明らかにする必要がある。また体験型アクティビティを、どの時間にどのように実施していくのかを検討する必要がある。

地域で行われている様々な活動に教職員が関心をもち、教育に活かす姿勢が今後さらにキャリア教育を推進していく上で重要になってくる。

「グッジョブフェスタ in にちなん」と学校教育のつながりを活かすために、中学校の教育課程で位置付けられている職場体験学習の充実を図る必要がある。来年度は、研究を継続している「人材バンク」の完成と活用を目指す。

【引用・参考文献】

- | | | |
|---|---------|---------------|
| ・ 小学校キャリア教育の手引き（改訂版） | 平成25年5月 | 文部科学省 |
| ・ 宮崎県キャリア教育ガイドライン | 平成25年1月 | 宮崎県教育委員会 |
| ・ 日南市重点戦略プラン2015 2019 | 平成27年3月 | 日南市 |
| ・ 新時代を生き抜く『4つの学ぶ力』を育てる!!日南教育ガイドライン（改訂版） | 平成28年3月 | 日南市教育委員会 |
| ・ 『若年者の就職能力に関する実態調査』結果 | 平成16年1月 | 厚生労働省 |
| ・ 社会人基礎力に関する研究会 - 「中間とりまとめ」 - | 平成18年1月 | 社会人基礎力に関する研究会 |
| ・ 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申） | 平成23年1月 | 中央教育審議会 |

【研究同人】

所長 黒木 康英（日南市教育委員会 教育長）
副所長 土持 光司（日南市教育委員会学校教育担当監）
事務局 西岡 雅弘 加治屋 輝昭 西川 元（日南市教育委員会 指導主事）
研究員 泊 俊一郎（渦上小学校） 三樹 浩二（油津中学校） 笠 大輔（油津中学校）
竹口 幸一（渦上小学校） 今村 陽一（飫肥小学校） 黒木 結（吾田小学校）
川崎 直幸（吾田東小学校） 日高 里緒（油津小学校） 矢野 秀平（飫肥中学校）
福島 和馬（北郷小中学校） 本部 和史（吾田中学校） 泉 真紀（榎原中学校）

研究アドバイザー

竹内 元 宮崎大学准教授（宮崎大学大学院教育研究科教職実践開発専攻）